

No.21 大岩オスカル幸男 一無題一

Oscar Sachio Oiwa

北川フラムさんのコラム / 1995 (平成7) 年 7月1日付 立川市市報記事より

大岩オスカル幸男は日系ブラジル人2世で建築家でもあり、最近は多方面で活躍している。この10匹の生き物は古生代に立川に棲んでいた生物が現代の都市に浮かびでてきたもので、作家が街につながる時間の記憶を大切に、なおかつ現在を未来に残していこうという考えをもっていることを教えてくれる。

これは3センチメートルの厚さの鉄の鋳物で、すべらないような凹凸と、しかしハイヒールなどがひっかからないような工夫がしてある。

舗道は美術の楽しい舞台で、今後もいろいろな展開が可能だろう。ビルの上から見ると、これらの生物がゾロゾロと建物に向かって行くようで、面白い効果がでているのだ。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

産業社会の産物である近代の人間は、進歩と生活レベルの向上を常に信じてきました。

しかし社会が近代化されればされるほど、その内定矛盾は増大し変化が大きくなればなるほどその混乱の度合いは大きくなっています。

立川の再開発計画は多くの近代都市が抱えるジレンマを例示しています。近代の信仰は現在のユートピアを決して実現させることはありません。

このジレンマへの解答として、私はファーレ立川に対し地球の表面に私たちの存在を永久に残すことを提案しました。

都市は誕生し、やがて死にます。確かなものもすべていつかは空中に霧散します。

そこで私が提案するのは、近代的論理のうちに、20世紀の人間を永遠に財産登録することです。